

Title	人類起源論(清野謙次, 金關丈夫共著, 人類學叢書第二篇, 岡書院發行)
Sub Title	
Author	大山, 柏(Oyama, Kashiwa)
Publisher	三田史学会
Publication year	1928
Jtitle	史学 Vol.7, No.3 (1928. 11) ,p.144(456)- 145(457)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19281100-0144">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19281100-0144</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ゐる。

以上は本書に關する極めて大略の紹介であるが、兎に角本書の特色は其の歴史的事實の思想史的方面の説明には努めて文明史家的の觀察をしてゐることであつて、此の點に於て興味を有すると共に、至極適切なる國史書の解説書であると信ずる。本書は徳川時代を以つて終つてゐるが、恐らく著者は更に明治以後の史學發達に就ても、今後公にされる事と思ふが、その完成を祈り合せてその上梓の日を待つ。(山本光郎)

### 人類起源論(清野博士著、金闢文夫共著者)

こうして見るとまだ學術に對する社會常識向上的餘地が多いことを遺憾に考へる。

本書は大體四篇に分かれ、第一篇を緒論とし、人類起源論の人類學上に於ける位置、人類起源論の歴史的回顧を述べ第二篇人類起源總論として、人類が動物より由來せる證據に就て、解剖學的、生理學的、病理學的證左を論じ、第三篇で人類起源系統論として、靈長類の系列と其の由來、古生人類、人類の系統に亘つて説き、第四篇で人類化成論と題し、人類化成の時、處、及び原因、人類化成の經過に亘つて終つて居る。而して立派で氣持ちよき圖版が十九と挿圖が一〇七もあるから四五〇頁に及ぶ本書としても、圖に饒ることはない。

本書を評論するに當つて、第一に見ねばならぬ所は、本書が共著であり、且つ其敘論に述べられて居る如く、清野博士は單に參加せられたのみで、主體は金闢氏の述作であることである。これは一般に共著の通有性として著しく個性を抹殺せらるゝことで、本書に於ても、清野博士一流の豪快味に乏しく、從つて本書から著者として責任の一部を負はれる博士を見るとは、博士を誤る恐れが大である。博士としては金闢氏に對する美しい友情の發露とも見らるゝが、吾れ等史前研究の學徒として重要視して居る本書の如き研究は、博士が責を負はるゝならば、負はるゝらしく、充分な個性發揮があつて欲しく思ふ。又吾れ等として金闢氏に何等の不足を感じない。雙方共に不利益のことゝ思うて居る。たゞ博士の盛名を本書に加ふ可く餘儀なくせしめたと思はるゝ出版事情の内容は知らないが、引いては讀者にも責任あることゝ思ふ。

これが内容に於ては、どんな書物でも有る如く、あらを探つたら、ありとするであらうが、邦文としては、こうした方面的の書物が皆無に近き有り様である以上、重要な一参考書である。而して私共は、清野、金闢兩氏などとは、同じく史前の研究をなす學徒ではあるが、研究の立場は、大に異なるものがある、兩氏は主として、所謂人類學と云はるゝ方面より見て居らるゝに對し、私共は史前學なる立場にあるから、本書に於ても、私共としての立場から見れば、色々と註文の出るのも止むを得ざることゝ思ふ。特に靈長類の由來等に於て、今少し地史學的方面を明にして欲しい、獨り吾れ吾れ文化を取扱つて居るものに限らず、其自然環境が動植物の成敗に大なる關係あることゝ信ずる。從つてこの自然環境の狀態、特に問題となつて居る第三紀の如き、どんな自然環境であつたかの復原が、讀者をして起源論の核心に觸れしめ得ること

と思ふし、現發見古生人類の消長に於ても、氷河現象がどれだけ直接間接に、彼等原人共に影響を與へたものかを知りたいものと思ふ。舊石時代の文化に於ては、ドモルティエに依ると明示せられて居る以上、文句は云はない。まだ云はしてもらへば、云ひたいことは無いでもない。然しそれは毫もすると評せんとしての評語に陥る恐れもあるから、卒直に讀後一感を述べるに止めたい、而してもし自分の著述に對する苦心と、世評とを顧るに於て、うなづき同情と敬意とを著者に捧げざるを得ない。末尾の引用書目も便利に利用し得るし、索引を附されたことも、邦書にあり勝ちな、労力節約に對する一慣例を破られたことをうれしく見る。

(昭和三、十、二、大山柏)

### 比較對照世界各國憲法(土橋友四郎著譯)

本年二月歐洲留學よりの歸途圖らずも大西洋上に於て キューナード會社の汽船ベレンカリヤ丸船中に食卓と共にしたる三名の邦人中、二名の憲法學者があつた。そは共に臺北帝大的教授たるべき井上季麿土橋友四郎の兩君であつて、余は三月十六日横濱歸着に至るまで略ぼその行を共にすることを得たのであるが、今、後者の渡歐前の著譯にかかる表題の書物の惠贈を得て、ユーマリリストなる井上君に見られぬ土橋君その人を見るの思ひがする。殊健著實なる土橋君の努力は遂にこの驚嘆すべき大著譯を完成せしむるに至つたものであらう。そは尋常一樣の根氣では到底能はざるの事業である。上杉慎吉博士もその序文(三——四頁)に於て『土橋

君は近來稀に見る篤學の人である。……任に地方に赴き……郵便局長の繁忙なる事務に從事せらるゝの間も、毫も學事を廢せらることなく……孜々吃々として各國憲法を翻譯し、之を我が帝國憲法に比照するの、煩雜勞多き仕事を爲し遂げんと努力せられたのである。大正十二年遂に官を退き、東京に在りて此事業を成就することを志され、拮据勉強今日に至つたのである。予の君に敬服したるは、翻譯に一器の誤謬なきを期せられ、これならば何處へ出すにも、一步も躊躇することなしとの自信を得るまで、四回も五回も書き改めらるゝの誠實なる態度である。屢々質問を受くる予の如きは、遂にうるさきに閉口した位である。前後十年遂に之を稿脚に附するに至れる、君も安心したであらうが、予も亦大安心した』と迎べられてゐる。これによつても君が苦心のほどは察せられる。

本書は、その構成を見るに、四六判前附二四頁、本文三一六頁、『各國憲法正文(邦譯)六城活字一〇四二頁』、附錄皇室典範及帝國憲法附屬ノ法令並主要關係法規七八頁、卷末の索引六六頁、總計千五百二十六頁の大著である。もちろん、著書の目的とするところは世界各國の憲法に共通の精神を求むると同時にその各國に於ける特異の精神を明かにし、『大日本帝國憲法は又云ふ迄もなく大日本帝國の憲法にして斷じて外國の憲法に非ず、(中略) 我が建國の國體に應じて外國の憲法を消化したる憲法』(序文八頁)なることを明にせんとするにあるのであるが、余が本書を推賞したきは寧ろ本書の附錄とも見るべきは各國憲法正文の邦譯が、この一書に網羅せられてゐる點にある。